

人と美術館とのかかわり

下開 千春

＜増加傾向にある美術館の入館者数＞

芸術文化には様々あるが、近年、美術館の入館者数が増加傾向にある（博物館類似施設を除く）。美術館を含む各種博物館全体の入館者数が大きく伸びていない中、2004年度の美術館の入館者数は約3,347万人と、01年から04年の3年間に19.2%の伸び率となっている（図表1）。各種博物館の中で比較する限り、美術館の入館者数の伸びは大きいといえるだろう。ちなみに、その間、美術館数は383から423に増え、伸び率は10.4%となっている（図表省略）。

図表1 種類別博物館の入館者数

（単位：千人）

区分	計	美術博物館	動物園	水族館	歴史博物館	科学博物館	総合博物館	動植物園	野外博物館	植物園
2001年度	113,977	28,071	17,603	17,163	19,617	12,334	9,249	5,953	1,362	2,625
2004年度	117,854	33,472	18,197	17,151	17,101	12,658	10,106	4,300	2,687	2,182
（構成比：％）	100	28.4	15.4	14.6	14.5	10.7	8.6	3.6	2.3	1.9
増減数	3,877	5,401	594	△ 12	△ 2,516	324	857	△ 1,653	1,325	△ 443
01年～04年間 の伸び率（％）	3.4	19.2	3.4	△ 0.1	△ 12.8	2.6	9.3	△ 27.8	97.3	△ 16.9

注：調査対象は、全国の施設。博物館類似施設を除く。博物館の構成比の高い順。△はマイナス。

資料：文部科学省「平成17年度社会教育調査」

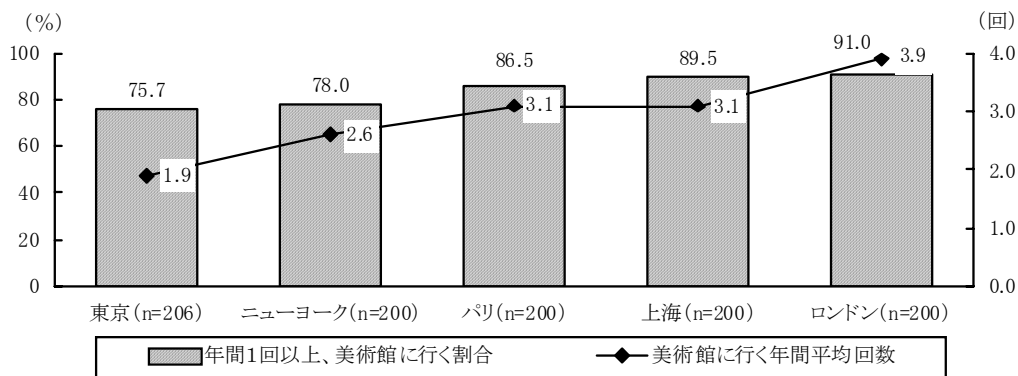
＜国際的に比較して利用回数が少ない東京＞

利用者が増加傾向にあるわが国の美術館の利用実態について、東京を例に他国の都市と比較した。

森ビル株式会社が実施した、18歳以上の学生と社会人を対象に行った「～東京、ニューヨーク、ロンドン、パリ、上海～ 国際都市アート意識調査」によると、ロンドン、上海、パリでは、「1年に1回以上美術館に行く割合」が9割前後と高いが、ニューヨークと東京は8割未満となっている（図表2）。

利用した人の年間平均回数についても、東京は1.9回と、ニューヨーク（2.6回）、パリと上海（3.1回）に比べてやや低く、ロンドン（3.9回）の約半分であった。5都市で比較すると、東京では美術館に行く人の割合が相対的に低く、平均回数も少ないことがわかる。

図表2 年に1回以上美術館に行く割合と年間平均回数



注：調査対象は東京、ニューヨーク、ロンドン、パリ、上海の5都市における18歳以上の学生・社会人1,006名
 (東京206名、他4都市各200名)、調査時期は2007年11月、調査方法はインターネット調査
 資料：森ビル株式会社「～東京・NY・ロンドン・パリ・上海～ 国際都市アート意識調査」

＜人が美術館に求めるもの＞

人が美術館に求めるものは何か。同様に、都市の比較でみてみた。

「何を求めて美術館に行きますか」との問いに対し、芸術の都と称されるパリでは「教養」(83.2%)が最も高く、パリ市民にとって美術館は教養を高める場所として認識されているようだ(図表3)。上海では、「心のやすらぎ」(76.0%)を求める割合が高い一方、「ビジネスにおけるヒント」にも17.9%の人が回答している。ロンドンとニューヨークでは、「非日常的な刺激」(それぞれ56.0%、55.1%)が他都市に比べて高い傾向にある。

以上の各都市に対し、東京では「気分転換」(64.1%)を求める声が多く、これは5都市の中でも最も高い。次いで、「心のやすらぎ」(53.8%)、「教養」(50.0%)、「非日常的な刺激」(37.8%)の順となっている。

図表3 美術館に求めるもの＜複数回答＞

(単位：%)

	教養	心のやすらぎ	気分転換	非日常的な刺激	創作活動におけるヒント	ビジネスにおけるヒント	購入	その他
東京(n=156)	50.0	53.8	64.1	37.8	10.9	4.5	1.9	5.1
ニューヨーク(n=156)	64.7	57.7	51.3	55.1	26.3	8.3	3.8	3.8
パリ(n=173)	83.2	52.0	56.1	27.7	12.7	3.5	1.2	4.0
上海(n=179)	69.3	76.0	43.6	10.6	24.0	17.9	5.6	1.1
ロンドン(n=182)	59.9	67.0	32.4	56.0	38.5	12.6	6.0	2.2

注：対象は「年に1回以上美術館に行く」と回答した人。回答の項目ごとに、最も高かった都市の数値を太字で表示
 資料：図表2に同じ

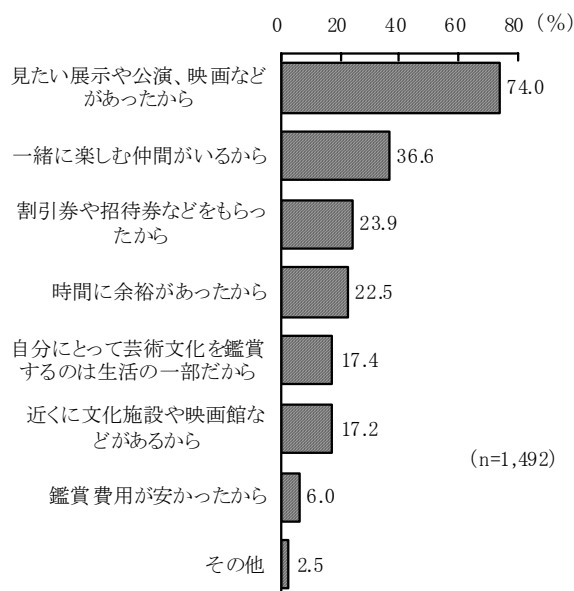
一方、蓑豊氏の『超・美術館革命—金沢21世紀美術館の挑戦』（角川書店 2007年）によると、欧米の美術館で来場者アンケートを行うと、なぜ美術館に来たのか？との質問に対し、一番回答が多いのはぶらりと立ち寄ったであるのに対し、日本では、何かいい展覧会や特別展があるから行くといわれている。

確かに、東京都民を対象にした「文化に関する世論調査」では、美術や映画、音楽などの芸術文化を鑑賞した理由として、「見たい展示や公演、映画などがあったから」（74.0%）が最も多くなっている（図表4）。「自分にとって芸術文化を鑑賞するのは生活の一部だから」（17.4%）といった回答のように、美術を含む芸術文化が生活の中に身近に存在していることを理由にした回答は、鑑賞した人の中で2割未満にとどまる。

＜美術館を含めた芸術文化への親しみの育成＞

美術館以外の芸術文化も含まれるが、前述の東京都の調べでは、文化の振興のために都に求めることとして、「子どもの頃から美術館や芸術に親しめる環境をつくる」をあげる人が60.5%で最も多かった（図表5）。幼い頃から芸術文化に親しむことで、芸術文化を身近に感じる意識が養われ、将来的に文化の振興につながるだろうと考える人は少なくない。近年、美術館など芸術活動にかかわる施設では、子どもたちを対象にした企画も数多く行われている。美術館をはじめとして、より多くの人々が芸術文化と接する機会を得ることで、芸術文化の土壌が育成されていくことが期待される。

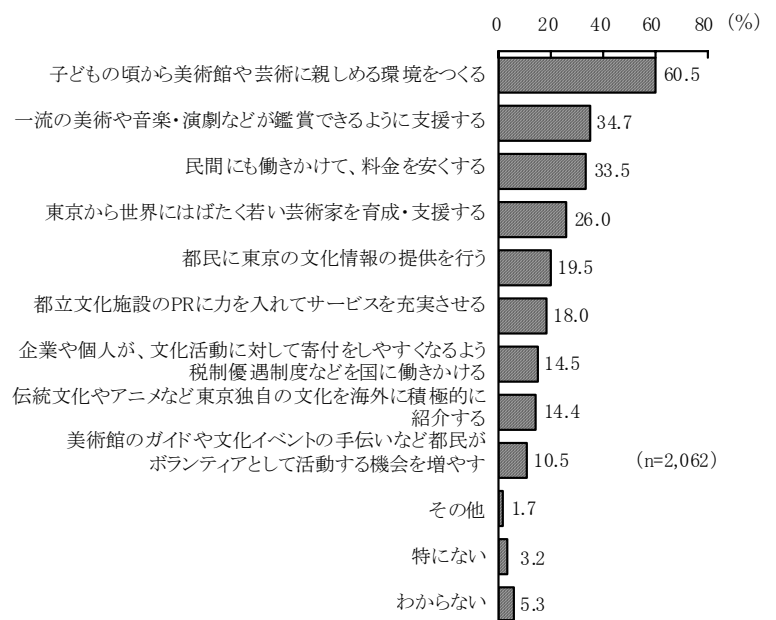
図表4 鑑賞した理由＜複数回答＞



注：調査対象は東京都に住む男女2,062人。調査時点から過去1年間に文化施設での鑑賞経験があると答えた人（1,492人）が回答。調査方法は個別訪問面接聴取法。

資料：東京都生活文化局「文化に関する世論調査」（平成16年3月）

図表5 文化を振興するために、都はどのようなことに力を入れたらよいと思うか＜複数回答、○は3つまで＞



資料：図表4に同じ